

資料

「五種限定統制」移行期の旧制中学校「国語読本」総目次(1)

武*
藤 清 吾

一 はじめに

二〇世紀前半の法制上における中等教育の基本は、一八九九(明治三二)年の中学校令改正、一九〇一(明治三四)年の中学校令施行規則制定によってほぼ確立することになった。旧制中学校の「国語」教育は、数次にわたる教授要目の改正によって「国語及漢文」科、「国語漢文」科と科目名を変えながら一九四三(昭和一八)年の「中等学校令」によって「国民」科の一部としての「国語」となった。¹⁾

「国語」教科書も、それぞれの時期の教授要目に準拠して、文部省の検定教科書を中心に、中等教育の言語・文学分野の教育内容の概要を示すものとして刊行され続けた。その多くは、「国語読本」という名称で、主に読むことが主眼に置かれてきた教科書であった。

「国語読本」は、その時代の支配的な教育理念や教育政策を反映してさまざまなに変化してきた。しかし、「国語読本」に学び教養を形成してきた教育関係者、「国語」に関心を寄せてきた人々の動向をも反映してきたことを見逃すことはできない。具体的には、文教政策の影響だけでなく、文芸実践、教育実践、思想実践などが「国語読本」の編集内容を規定し

たのである。たとえば、一九二〇年代は、当時の新政府体制の整備と日清・日露戦争を契機にした国家主権の確立を背景とするナショナリズムの思潮と、高揚する文芸実践、自由教育実践の思潮とが交錯した時代であった。それらの思潮が重複して反映した「国語読本」が編集されたのである。一九三〇年代前半には、これまでの教科書編集の経験が蓄積され、さらに教育実践の展開とその理論化に支えられて、基本的には、現代の「国語」教科書をも規定する典型が作られていった。²⁾これらの具体的な様相は、拙著『芥川龍之介編『近代日本文芸読本』と「国語」教科書 教養実践の軌跡³⁾で明らかにしてきた。

一九三〇年代後半からは、台頭してきた軍国主義による教育への介入が「国語読本」を変質させていった。それが、今回掲出する資料の「国語読本」である。

二 「五種限定統制」に至るまでの「国語」教育施策

一九三七(昭和一二)年に中学校教授要目中改正が公布された。「国語

* 広島経済大学経済学部教授

漢文」科の目標として次の内容が掲げられた。

国語漢文ニ於テハ国語ノ理会及応用ノ能ヲ得シメ漢文ノ読方及解釈ノ力ヲ養ヒ特ニ我が国民性ノ特質ト国民文化ノ由来トヲ明ニスルコトニ注意シ国民精神ノ涵養ニ資スルコトヲ要ス

国語ニ於テハ国語ノ構造・特質ヲ知ラシメ国語ノ正確ナル理会ト思想・体験ノ明確自由ナル表現トニ就キテ指導シ国語ガ国民性ノ具現タルコト及国語ノ教養ガ国民ノ自覚ヲ促シ品位ヲ高ムル所以ナルコトヲ会得セシメテ国語愛護ノ念ヲ培フト共ニ美的・道徳的情操ヲ陶冶スベシ又漢文ニ於テハ漢文ノ語彙・構造等ノ特質ニ留意シテ国語トノ関係ヲ明ニシ漢文ノ正確ナル理会ニ就キテ指導スルト共ニ其ノ我が精神生活ニ対スル意義ヲ会得セシムベシ

この前の改正である一九三一（昭和六）年の中学校教授要目改正は次のとおりである。

国語講読ハ読方及解釈、話方・暗唱・書取ヲ課シ其ノ材料ハ総テ文章ノ模範タリ而シテ国体ノ精華、民族ノ美風、賢哲ノ言行等ヲ叙シ以テ健全ナル思想、醇美ナル国民性ヲ涵養スルニ足ルモノ、文芸ノ趣味ニ富ミテ心情ヲ高雅ナラシムルモノ、日常ノ生活ニ裨益アリ常識ヲ養成スルニ足ルモノ等タルベシ

両者を比較すると、一九三七年の改正の主眼が、一九三一年の「醇美ナル国民性ヲ涵養スル」という文言から、「我が国民性ノ特質ト国民文化ノ由来」を明らかにして「国民精神ノ涵養ニ資スル」ことに変わったこ

とは明らかである。

一九三〇年代は、「満州事変」を契機にした日本政府の中国政治への介入、軍部の大陸進出に見られるナショナリズムが高揚する一方で、左翼運動、労働運動、農民運動などが活発化していく情勢にあった。教育の分野でも、日本教育労働者組合が結成され、教育科学研究、生活綴方実践も豊かに展開されて、自主的民主的な教育思潮が小学校から大学まで広がった。こうした動きを止めるために、文部省は小学校教員の思想問題対策協議会や思想問題講習会を各地で開催し、検定不合格、未検定教科書の使用実態を重視して中等教科書協会に厳重注意を行うという徹底ぶりであった。さらに、文部省に思想局が設置され、「建國ノ大義ニ基キ日本精神作興等ニ関シ教育関係者ノ任務達成方」を訓令した。

文部省が『国体の本義』を刊行したのは一九三七（昭和一二）年であり、中学校教授要目改正を公布したのもほぼ同時であった。一九三八（昭和一二）年には「国家総動員法」が公布されるわけであるから、一九三〇年代中盤に大きな教育政策の変更がなされたということになる。

文部省は、一九四〇（昭和一五）年九月一二日付で中等教育教科書の使用を各教科五種類に限定するよう通達した。その理由として、文部省の『学制八十年史』⁴では、発行教科書数の増加、過当競争販売の危惧、資料の需給困難が指摘されているが、これまでの文部省の政策動向を考慮すると、実際のところは、需給困難を口実にした、事実上の統制強化であったことがわかる。

『学制八十年史』は、五種類の教科書に限定したことを「いわゆる五種選定」と書いているが、検定教科書のなかから五種類の教科書を選び、さらにそこから選択させるという施策は、限定されたなかでの選択に過ぎず、事実上の統制強化であることは明らかである。「選定」という自主

的な意味を持つ表現は、当時の政策動向を踏まえたものとしては不適切であり、本稿では「五種限定統制」と表現する。

「国語漢文」科では次の五種類の教科書が選定され、『昭和十六年度使用中等学校教科用図書総目録（中学校の部）』として公表された。

- ・岩波編輯部編『国語 改訂版』岩波書店
- ・吉田弥平編・石井庄司補訂『中学国文教科書』光風館書店
- ・五十嵐力編『純正国語読本 改訂版』早稲田図書出版社
- ・東條操編『新制国語読本』三省堂
- ・金子元臣編『新編中等国語読本 新制版』明治書院

五種類の教科書に限定された背景について、吉田裕久は、西尾実の回想⁵⁾から「五種選定が、前年度使用実績に基づいて行われたことが伺える⁶⁾」としている。西尾の回想は次のようである。

前年七月に完成し、十二月に検定済となった、岩波書店刊行の『国語女子用』十冊は、この年の新学年から採択・使用が開始された。教科書としての出来ばえは男子用を上まわるものとされたが、戦時下になって、民間出版社の検定教科書が前年度実績順の五社に制限されたため、発足がおくれて、実績が及ばず、発行停止となったので、男子用のような普及を見ないままに終わってしまった。

結局、「前年度実績順の五社に制限されたため」、実績が及ばなかった『国語女子用』は、西尾ら岩波編輯部が自信を持っていたにもかかわらず「発行停止」となり、高等女学校生の手に届けられることはなくなったのである。

三 「五種限定統制」下の「国語読本」

「五種限定統制」された「国語読本」が使用されたのは、一九四一（昭和一六）年からである。『学制八十年史』によれば、文部省が「五種限定統制」へと具体的に動いたのは一九四〇（昭和一五）年の七月から一〇月である。「五種限定統制」が「前年度実績順」ということであれば、一九四〇年度あるいは前年の一九三九年度の使用実績ということになる。これらの年度に使用された「国語読本」は、一九三七（昭和一二）年の教授要目中改正に準拠して編集され、一九三八年度より使用された。さきに見たように、「国民精神ノ涵養ニ資スル」ことを目標にした教科書である。

これらの教科書が実績として上位にあったということは、学校現場をはじめ教育関係者の支持があったことである。当時の作られた社会風潮のもとでは「国民精神ノ涵養ニ資スル」という点での支持は当然であるとしても、それだけで子どもたちを教育できるわけではない。教科書として採択されるだけの特色があったはずである。

一九四〇年前後という「国家総動員体制」期の検定教科書とはいえ、編集者の方針に基づいて教材が収められたものを検定審査しているわけである。つまり、編集者にしてみれば、子どもたちが日々学校で学ぶ姿を目に浮かべて編集したものである。そうした編集者の思いのいくつかは検定によって否定されることになったであろうが、検定後も編集者の思いが残った場合もあったと考えられる。その詳細は明らかではないが、これらの教科書から、国家政策に従わざるを得なかった側面とともに、教育者としての信念をわずかでも貫こうとした側面を見ることが可能なはずである。

強権と暴力に支配された社会のもとで行われた事実は、そのような楽天的な評価になじまないという見方もある。しかし、どんなものにも矛盾や対立、葛藤が反映されている。それを考察して初めて真の学問的評価が定まると確信している。

一九四五年に日本は敗れ、占領期を経て新日本建設へと向かう。軍国主義時代のすべてを廃棄して、まったく新しいものを作ることは容易ではない。当然、その前に使われていたものを加工、修正していくことになる。「国語」教育でも、敗戦前の教育を参照したであろう。教科書の場合も「墨塗り教科書」として使用された事実がその典型として記憶されている。戦後の「国語」教科書編集の際に、戦前の教科書を検討して、それを基礎に新しい教科書が作られたことは容易に想像できる。一九四〇年代の教科書を検討することは、直接二〇世紀後半の入り口に刊行された「国語」教科書とそれに学ぶ実践を視野に入れることを意味するのである。

「五種限定統制」された教科書の出自と編集者は次のとおりである。

(1) 『国語 改訂版』

西尾実が中心になって編集した教科書の改訂版である。一九三五（昭和一〇）年から使用され、年度を追うごとに採用校が増えて全国の七割を超えた。西尾実は、『国語国文の教育』（古今書院、一九二九年）を契機に「行的認識」を核にした国語教育学研究と「徒然草」などの「国文学」研究を進め、第二東京市立中学校教諭から東京女子大学教授となっていた。

(2) 『中学国文教科書』

一九〇七（明治四〇）年より使用されてきた長い歴史を持った教科書である。編者の吉田弥平は「国文学」者で東京高等師範学校教授を

務め、中等教育「国語」教科書を多く編集した。吉田は一九三七（昭和一二）年に鬼籍に入っており、石井庄司が補訂している。石井は、東京高等師範学校教授を務め、「国文学」と「国語」教育とを一元的にとらえる立場に立っていた。

(3) 『純正国語読本 改訂版』

一九二九（昭和四）年から使用された教科書で、その発刊は当時の「国語」教育界に影響を与えた。五十嵐力は、『早稲田文学』記者、東京専門学校講師、早稲田大学教授を務め、『文章講話』（早稲田大学出版部、一九〇五年）などの文章学、『作文三十三講』（同、一九一三年）、『国語の愛護』（同、一九二八年、再刊白水社、一九三八年）などで作文論、「国語」教育論を展開した。

(4) 『新制国語読本』

国立教育政策研究所付属教育図書館、東書文庫などでの所蔵状況から判断して、一九三三（昭和八）年の修訂版が最初の刊行である。東条操は「国語学」者で、方言学を専攻としている。旧制静岡高等学校、広島高等師範学校教授を務め、『大日本方言地図 国語の方言区画』（育英書院、一九二七年）をまとめた。柳田国男、橋本進吉らと『方言』（一九三一年）を創刊している。

(5) 『新編中等国語読本 新制版』

一九三三（昭和八）年刊行の『新編中等国語読本』が最初である。ただし、金子元臣はすでに落合直文編『中等国語読本』（一九二六年）の補訂を担当しており、この読本はその後継である。金子は、「国文学」者、歌人で、國學院大学教授を務め、宮内庁御歌所寄人であった。本資料は、一九四一年に使用を許可された五種類の教科書収録教材の分析するために、一九三八年の訂正再版時に収録された教材を確認し

て、それぞれの編集者が中学生に示した教育内容を考察し、四〇年代前後の「五種限定統制」期に、「国語」教育分野で、教養形成がどのように図られていたかを見ていくためのものである。

今回は、「五種限定統制」移行期の教科書のうち『純正国語読本 改訂版』、『新制国語読本』、『新編中等国語読本 新制版』の総目次を掲出する。⁷⁾

注

(1) 「国語」と表記するのは、教科としての「国語」が一九世紀から二一世紀前半にかけて日本近代社会で歴史性・思想性を帯びた教科名として使用されたことを明確にするためである。

(2) 二〇世紀前半の「国語」教科書は全体としては教材を並べるだけの雑纂形

式であったが、岩波編輯部編『国語』（一九三四年）は単元配列を意識した編集であった。

(3) 『芥川龍之介編『近代日本文芸読本』と「国語」教科書 教養実践の軌跡』 溪水社、二〇一一年二月二十五日

(4) 文部省『学制八十年史』大蔵省出版局、一九五四年三月一日、三八一～三八二頁

(5) 『年譜』『西尾実国語教育全集』第一〇巻、教育出版、一九七六年六月二一日、五二三頁

(6) 吉田裕久「『中等国文』（一九四三）の研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第五八号、二〇〇九年十二月二十五日、九四頁

(7) 『純正国語読本 改訂版』は筆者蔵、『新制国語読本』は鳴門教育大学図書館蔵、『新編中等国語読本 新制版』は国立教育政策研究所付属教育図書館蔵。

付記 本研究は、広島経済大学特定個人研究費の助成を受けた研究成果の一部である。

表1 五十嵐力編『純正国語読本 改訂版』総目次

一九三七（昭和一二）年七月三〇日発行 一九三八（昭和一二）年一月二五日訂正再版発行 早稲田図書出版社

卷一			卷二		
一	御修学時代の聖上陛下	石井国次	一	現つ神明治大帝 その一	二
二	御帽子に御手が	一一	二	現つ神明治大帝 その二	七
三	昭和の日本	北原白秋	三	現つ神明治大帝 その三	一六
四	伊勢の神宮を拝みて	一九	四	胸を刻む国旗の上下	二二
五	小野の道風	二六	五	日の丸の歌	二八
六	良寛さま	四一	六	観心寺	三一
七	菖蒲の節句	相馬御風	七	武蔵野	三七
八	苺	島崎藤村	八	小さい旅人	四六
九	此の一戦	水野広徳	九	元七黒七鳥	五三
一〇	遅かりし一時間	七三	一〇	文字	六〇
一一	大海原の歌	坪内逍遙	一一	誠拙和尚	七一
一二	時の歴史	竹内時男	一二	無類の的	七五
一三	蜘蛛の糸	芥川龍之介	一三	仙人と石	七九

卷三		卷四	
一四 愛犬ボチ	長谷川二葉亭	一四 歌がたり	中村秋香
一五 猫	夏目漱石	一五 蓑虫に	落合直文
一六 子供	小林一茶	一六 冬の雪国 その一	八九
一七 郷里なる愛児に		一七 冬の雪国 その二	九七
一八 狭霧の穂高		一八 労苦と快樂	一〇二
一九 乃木大将の幼時	横山健堂	一九 無名の指	一〇八
二〇 美しき球	矢島鐘二	二〇 野口英世	一二五
二一 形見の万年筆	池田宣政	二一 我が幼時	一三八
二二 自然の推移	相馬御風	二二 歩いた途	一四三
二三 ふるさと	石川啄木	二三 紋所の話（講演）	一四五
二四 秋の嫩草山	島村抱月	二四 美しき国民性	一五六
		二五 魚の骨	一六四
		二六 史伝を読むべし	一七〇
		二七 明治天皇御製頌歌	一七四
卷三		卷四	
一 春の花のいろく	その一	一 明治神宮	一
二 春の花のいろく	その二	二 二月堂と三月堂	七
三 神風号	内田百閒	三 鰯引	一一
四 青年と体育	永井潜	四 胆力	一三
五 由良の思出	薄田泣菫	五 翼の音	二一
六 厨子王 その一	森鷗外	六 狩野芳崖とフエノロサ	二七
七 厨子王 その二	森鷗外	七 潜水艦上の或る日 その一（講演）	三八
八 読み書きの第一義		八 潜水艦上の或る日 その二（講演）	四八
九 牛		九 旅	六〇
一〇 俗字と当字	藤井紫影	一〇 五虹の錦帯橋	六三
一一 富士の大観 その一	大町桂月	一一 夜叉王	六九
一二 富士の大観 その二	大町桂月	一二 天然の恵	八五
一三 美しい日本	山村暮鳥	一三 大同江	八八
一四 福沢翁の生家を訪ふ		一四 元日や	一〇〇
一五 其の時の怖さ加減	福沢諭吉	一五 悔いて食はず	一〇一
一六 俳句評釈	正岡子規	一六 熊の話	一〇五
			（二宮翁夜話）
			相馬御風

一七	宿かりの死	一六	志賀直哉	一七	仙崖和尚	一四	具原益軒
一八	鳥島漂流記 その一	一三三		一八	清福	一九	貝原益軒
一九	鳥島漂流記 その二	一四〇		一九	名君	二四	菊池寛
二〇	海の迷信（講演）	一四九		二〇	大川の水	三四	芥川龍之介
二一	空	一五九		二一	帰朝	四四	鳥崎藤村
二二	備後畳	一六三		二二	鬼作左の嬉し泣き	四九	新井白石
二三	大西郷の大廈	一七一		二三	杉浦重剛翁 その一	五六	小笠原長生
二四	吾が家の富	一七八		二四	杉浦重剛翁 その二	六三	小笠原長生
二五	国史に返れ	一八二		二五	五箇条の御誓文	七一	徳富蘇峰
卷五				卷六			
一	春の動き	一	長塚節	一	御大礼の御発軔を送り奉る	一	
二	伊藤仁斎の旧居古義堂 その一	七	市島春城	二	国民性の核心 明、浄、直 その一	九	
三	伊藤仁斎の旧居古義堂 その二	一三	市島春城	三	国民性の核心 明、浄、直 その二	一三	
四	朝（詩）	一九		四	伊藤公を誅ぶ	一九	井上馨
	雀		北原白秋	五	星座の趣味	二三	山本一清
	朝なり		蒲原有明	六	傷をなめる獅子	三一	高村光太郎
五	仕事の邪魔	二四		七	蓮命の丘 その一	三五	島村抱月
六	春と夏（俳句）	二八	（諸家）	八	蓮命の丘 その二	四四	島村抱月
七	心の関守	三〇	柴田鳩翁	九	つれづれなるまゝに	五五	卜部兼好
八	銀の皿 その一	四一	黒岩涙香	一〇	趣味の巖島	六〇	吉田絃二郎
九	銀の皿 その二	四八	黒岩涙香	一一	童心童眼	六六	吉田絃二郎
一〇	桜と松と燈火	五四	松平定信	一二	東山より不破関まで	七七	（東関紀行）
一一	舟路（詩）	五八	島崎藤村	一三	秋と冬	八一	（諸家）
一二	蘭学事始	六〇	杉田玄白	一四	国際に用ゐられた茶の湯	八三	
一三	郵便切手と玩具	六六	内田魯庵	一五	柔術	八八	小泉八雲
一四	両国橋	七四	石川雅望	一六	木曾殿の最期	九四	（平家物語）
一五	風景と建築	八三	渡邊十千郎	一七	我が手紙観	一〇一	
一六	西湖の美観	九一	佐々木指月	一八	九十九里浜	一〇五	伊藤左千夫
一七	松下村塾	九六	徳富蘇峯	一九	大仏殿の柱ぐさり	一〇八	十返舎一九
一八	刑前の書	一〇三	吉田松陰	二〇	絵の山水	一一五	橘千蔭
一九	天徳寺琵琶に泣く	一〇五	湯浅常山	二一	音に聞こゆる為朝	一一七	（保元物語）

卷七			卷八		
二〇 武蔵坊(川柳)	(俳風柳多留)	一〇八	二二 野州の山と越の海	尾崎紅葉	一二四
二一 軽井沢二日	正宗白鳥	一一〇	二三 狂歌八首		一三九
二二 火災と地震	鴨長明	一一三	二四 世界の行末 その一	横山又次郎	一四一
二三 夕雲雀(和歌)	近世歌人	一一七	二五 世界の行末 その二	横山又次郎	一四六
二四 日本の真珠	川村多実二	一二三	二六 アイヌ民族の純情	金田一京助	一五二
二五 坦庵と象山	坪内逍遙	一三二	二七 千曲川旅情の歌	島崎藤村	一六二
二六 忠僕と二將軍	小笠原長生	一五一	二八 玉かつま抄	本居宣長	一六四
二七 秋霧	北畠親房	一六四	二九 本居翁の遺蹟	芳賀矢一	一七一
二八 日本民族論	白鳥庫吉	一六八	三〇 国民の覚悟	大西祝	一七九
二九 曙光(詩)	西条八十	一八〇			
卷七			卷八		
一 国語の愛護 その一		一	一 宗湛日記の豊太閤 その一	和辻哲郎	一九
二 国語の愛護 その二		七	二 宗湛日記の豊太閤 その二		九
三 国語の愛護 その三		一六	三 中宮寺の観音	三木露風	二五
四 吉野山	吉田絃二郎	二一	四 斑鳩宮	(狂言)	二九
五 古今集より		三一	五 二千石	三木露風	二五
六 アルプス、ロッキーの思出 その一	榎有恒	三五	六 わが名の徳	兼好法師	三五
七 アルプス、ロッキーの思出 その二	榎有恒	四〇	七 花はさかりに	西田幾多郎	四二
八 日野山	鴨長明	四四	八 知と愛		四六
九 人間生活と自然	吉江喬松	四九	九 擬古小品	中島広足	五一
一〇 海三題		五六	一 蚊遣火	石川依平	
元旦の挨拶	白鳥省吾		二 虫の音	伴蒿蹊	
海の風景	堀口大学		三 所感ありて記す	北村透谷	
月かゝりて空に	福田正夫	五九	一〇 山庵雜記	十一 俳家	
一 西郷と大久保	山本有三	七二	一一 高名の発句	松尾芭蕉	五九
二 世界大戦争 その一		七二	一二 松島より平泉へ		六二
三 世界大戦争 その二		七七	一三 中尊寺を訪ふ		六二
四 五重塔 その一	幸田露伴	八五	一四 光頼卿参内	(平治物語)	七九
五 五重塔 その二	幸田露伴	九三	一五 新古今集より	十四 歌人	八五
一六 塔影	河井醉茗	一〇二	一六 羅馬の二雄弁	坪内逍遙記	九一
一七 寺子屋	竹田出雲	一〇五	一七 狭き国は広く、峻しき国は平けく		一一一

巻九		巻十	
一八 芳流閣	滝沢馬琴	一八 銀の猫	上由秋成
一九 心機一転	芥川龍之介	一九 山家と金塊	
二〇 才芸	(十訓抄)	二〇 山家集より	
二一 落葉松	北原白秋	二一 金塊集より	
二二 頼政	世阿弥	二二 歌の響	島木赤彦
二三 競が事	(平家物語)	二三 茶道の精神 その一	奥田正造
二四 理想的生活	大西始	二四 茶道の精神 その二	奥田正造
二五 倫敦の二大記念	高田早苗	二五 我が三大国民道 その一	奥田正造
二六 都市美論	佐藤功一	二六 我が三大国民道 その二	
一 詔書		一 忘我遊神同化 その一	坪内逍遙
二 連盟離脱の声明	松岡洋右	二 忘我遊神同化 その二	坪内逍遙
三 日輪頌	正富汪洋	三 幻住庵記	松尾芭蕉
四 古文学に現はれた祖先の面影	夏目漱石	四 芭蕉の事	島崎藤村
五 山路を登りながら		五 その姿はかはるとも	近松門左衛門
六 榛名山	村上鬼城	六 知恵の振売	井原西鶴
	高浜虚子	七 平安城	藤岡作太郎
	河東碧梧桐	八 菅公の左遷	(大鏡)
七 落花の雪	(太平記)	九 『枕の草子』から	
八 東下り	(伊勢物語)	一〇 紫式部と源氏物語	(栄華物語)
九 天つ使	(竹取物語)	一一 法成寺の造営	本多静六
一〇 山岳美論	吉江喬松	一二 庭園に現はれたる我が国民性 その一	本多静六
一一 隅田川	世阿弥	一三 庭園に現はれたる我が国民性 その二	(古事記)
一二 橘曙覧の歌	正岡子規	一四 古事記三章	(源氏物語)
一三 万葉集より		一五 須磨の秋風	綱島梁川
一四 百魚譜	横井也有	一六 愛	阿部次郎
一五 新島守	(増鏡)	一七 生活の中心	
一六 明治以前の我が絵画	藤岡作太郎	一八 万葉集に現はれたる純真愛	中村吉蔵
一七 大原御幸	(平家物語)	一九 大隈重信	大隈重信
一八 芳宜園大人の霊を祭る	村田春海	二〇 東西文明の比較	清原貞雄
		二一 皇道	

一九	世界の四聖 その一	高山林次郎	一一二
二〇	世界の四聖 その二	高山林次郎	一一一
二一	船旅	(土佐日記)	一二七
二二	汽車に乗りて	上田敏	一三四
二三	現代の文学	千葉亀雄	一三八
二四	待問	橘守部	一五一
二五	模範国民の養成 その一 (講演)	高田早苗	一五七
二六	模範国民の養成 その二 (講演)	高田早苗	一六六

表2 金子元臣編『新編中等国語読本 新制版』総目次
一九三七(昭和一二)年五月一二日発行 一九三七(昭和一二)年二月三〇日訂正版発行 明治書院

卷一		卷二	
一	少年の春	一	聖徳を仰ぎて
二	伊勢参宮	二	昭和の大御代(詩)
三	さくらの花	三	大海の日出
四	ほがらか(詩)	四	吾輩は猫である
	一、小鳥	五	蟻と蜜蜂と鳩
	二、水車	六	忍耐
五	刀鍛冶	七	邯鄲の夢
六	わが工人の魂	八	希望(詩)
七	裸体の奮戦	九	智仁勇の名將
八	菖蒲の節句		一、道雪
九	湖山長者		二、武勇
一〇	端書だより(書簡)		三、仁愛
	一、京都より旧師へ		四、義侠
	二、桃山より父へ	一〇	忠君愛国
	三、奈良より友へ	一一	茶碗の茶
一一	富士登山	一二	茶の花
一二	犬ころ	一三	豊太閤
一三	夏二篇	一四	機智縦横
	一、庭		一、百人一首の対句
			二荒芳徳
			三木露風
			徳富蘆花
			夏目漱石
			鶴見祐輔
			武藤山治
			松井等
			西条八十
			八波則吉
			芳賀矢一
			南条文雄
			薄田泣菫
			矢野文雄

<p>一 吾人の皇室 二 御階の桜（和歌） 三 春宵 四 星の寿命 五 筍 六 物のさとり</p>	<p>永田秀次郎</p>	<p>一 日の神 二 建国歌（詩） 三 下岡蓮杖 四 松下村塾を訪ふ 五 南洲遺訓 六 野のほひ</p>	<p>芳賀矢一 北原白秋 下村海南 西郷隆盛 薄田泣菫</p>	<p>一 六 一〇 一八 二三 二七</p>	<p>一 六 一〇 一八 二三 二七</p>
<p>二、畑 一四 虎狩 一五 ゴンドラの町 一六 港（詩） 一七 物の句 一八 偉人東郷元帥 一九 明治天皇の御遺物を拝す 二〇 同 二一 驟雨浴 二二 狂夫の言 二三 一、かんにん 二四 二、愚公の山 二五 形見の万年筆 二六 酒匂なる二児へ（書簡） 二七 子供と小鳥 二八 雀 二九 一万メートル 三〇 日本一の百姓 三一 附録 国語仮名遣一覧</p>	<p>若山牧水 徳川義親 大類伸 大関五郎 小林一郎 （朝日新聞社編） 笠井信一 笠井信一 徳富蘆花 柳沢淇園 室鳩巢 池田宣政 大町桂月 中西悟堂 北原白秋 土岐善麿 新井友吉</p>	<p>二、羽織と袴 三、姨捨山の月 一五 森の絵 一六 猿の話 一七 無類の的 一八 格言五則 一九 紋章 二〇 日章旗 二一 胡頹子 二二 五兵衛大明神 二三 同 二四 箱根より（書簡） 二五 虫出づる頃 二六 藤蔓と櫨の木 二七 京都の春 二八 ただの人（今様） 二九 西郷南洲 三〇 開口録 三一 一、蜈蚣期に後る 三二 二、雀を捕る術 三三 花に教へられて 三三 安宅</p>	<p>吉村冬彦 長尾宏也 五十嵐力 沼田頼輔 松波仁一郎 新井白石 小泉八雲 窪田空穂 横山桐郎 八波則吉 大和田建樹 勝海舟 （前戯録） （開口新語） 篠原温亭 坪内逍遙</p>	<p>七三 七五 八六 九二 九四 一〇〇 一〇七 一一二 一二二 一三〇 一三〇 一三一 一三一 一四四 一四七 一五二 一六〇 一六六</p>	<p>七九 七九 八一 八九 九八 一〇二 一〇三 一一三 一一七 一二一 一二八 一三六 一四〇 一四八 一五五 一六〇 一六二 一六五 一六六 一六七 一七三</p>
<p>卷三</p>	<p>卷四</p>	<p>附録 国語仮名遣一覧</p>	<p>附録 国語仮名遣一覧</p>	<p>三三</p>	<p>三三</p>

一、武道と書道	二七	一、玉菜	二七
二、柿の種	二八	二、里芋	二八
三、書奴を愧づ	二九	三、白菜	三一
四、無芸	三二	四、栗	三二
七 一水兵の日本海海戦	三三	七 阿蘇山	三六
八 産土神と氏神	四〇	八 ワカナの歌	四〇
九 故郷の松	四六	九 片言をいふまで	四八
一〇 遙かに私の村が(詩)	五二	一〇 三樹三郎とその師	五八
一一 真淵と宜長	五五	一一 閑日月(和歌)	六六
一二 友情	六三	一二 漱石書簡	七〇
一三 野口英世	六九	一、茶碗	七〇
一四 比叡の鳥	八一	二、自画自讃	七一
一五 児獅子	八六	一三 鯉	七三
一六 バグダード旅行記	九二	一四 林子平	七三
一七 菩提樹の花蔭から(書簡)	九九	一五 南京の壺	八二
一八 椰子の実(詩)	一〇二	一六 大石良雄	九〇
一九 健陀多	一〇四	一七 討人の光景を報ず(書簡)	九九
二〇 武士道	一一五	一八 笑話四則	一〇〇
二一 胆力の養成	一二一	一、湯漬	一〇〇
二二 鬼作左	一二七	二、朱槍	一〇〇
二三 人の香(書簡)	一三四	三、数珠	一〇一
二四 初秋海浜記	一三八	四、留守	一〇二
二五 満州国の我が移民村	一四六	一九 恩	一〇三
二六 歌話	一五五	二〇 肉弾三勇士	一〇七
一、とりゐ坂	一五五	二一 一系の子(俳句)	一一一
二、あがたの宿	一五六	二二 初学者のために	一一五
三、沖つ白波	一五七	二三 文字	一二〇
二七 厨子王 その一	一五九	二四 スキー	一二八
二八 厨子王 その二	一六八	二五 早春のスケッチ	一三三
附録 字音仮名遣一覧		一、山上の春	一三三
		二、小諸の思出	一三五

<p>二六 古城のほとり (詩)</p> <p>二七 上杉鷹山</p> <p>二八 形</p> <p>二九 大地もとほす</p> <p>三〇 坦庵と象山</p> <p>附録 字音假名遣一覽</p>	<p>島崎藤村 一三九</p> <p>(日本英雄伝) 一四一</p> <p>菊池寛 一五二</p> <p>渡辺華山 一五八</p> <p>坪内逍遙 一六四</p>
<p>卷五</p>	<p>卷六</p>
<p>一 日本 の 国号</p> <p>二 わが世を守れ</p> <p>三 御製と教育</p> <p>四 忠度と俊成</p> <p>五 花の譜</p> <p>一、梅</p> <p>二、杏</p> <p>三、雪国</p> <p>四、芙蕖</p> <p>五、朴</p> <p>六、瞿麦</p> <p>七 天才と身体</p> <p>芸苑逸話</p> <p>一、絵仏師良秀</p> <p>二、鳥羽僧正</p> <p>八 心の耳</p> <p>九 競争と科学</p> <p>一〇 俳句評釈</p> <p>一一 淡路島 (俳句)</p> <p>一二 そぞろ言</p> <p>一、雪の朝</p> <p>二、青き眼</p> <p>三、賤しげなるもの</p>	<p>大森金五郎 一</p> <p>(明治天皇御製) 六</p> <p>芳賀矢一 九</p> <p>(源平盛衰記) 一五</p> <p>幸田露伴 一九</p> <p>二〇 二〇</p> <p>二一 二一</p> <p>二二 二二</p> <p>二三 二三</p> <p>二四 二四</p> <p>三一 三一</p> <p>(十訓抄) 三一</p> <p>(古今著門集) 三二</p> <p>北原白秋 三四</p> <p>丘浅次郎 三八</p> <p>沼波瓊音 五〇</p> <p>吉田兼好 五九</p> <p>五九 五九</p> <p>六〇 六〇</p>
<p>一 楠公精神</p> <p>二 月雪花</p> <p>三 武蔵野</p> <p>四 耕人 (詩)</p> <p>五 臨終の平田篤胤</p> <p>六 躍進日本</p> <p>七 崇祖</p> <p>八 為朝の軍議</p> <p>九 初瀬詣</p> <p>一〇 葛温泉より (書簡)</p> <p>一一 乃木大将の殉死</p> <p>一二 神皇正統記</p> <p>一、人臣の道</p> <p>二、正道</p> <p>一三 如意輪堂</p> <p>一四 出蘆 (詩)</p> <p>一五 清風高義</p> <p>一六 短歌評釈</p> <p>一七 新年歌御会始に</p> <p>一八 諷論</p> <p>一、柑子の木</p> <p>二、石清水詣</p> <p>三、獅子狛犬</p>	<p>中村孝也 一</p> <p>芳賀矢一 八</p> <p>国木田独步 一三</p> <p>川路柳虹 二二</p> <p>五十嵐力 二五</p> <p>渡邊鏡蔵 三四</p> <p>芳賀矢一 四一</p> <p>(保元物語) 四八</p> <p>本居宣長 五六</p> <p>大町桂月 六一</p> <p>徳富蘇峰 六五</p> <p>北畠親房 七二</p> <p>七二 七二</p> <p>七五 七五</p> <p>(太平記) 七八</p> <p>土井晩翠 八四</p> <p>室鳩巢 九〇</p> <p>齊藤茂吉 九六</p> <p>金子元臣 一〇二</p> <p>吉田兼好 一〇七</p> <p>一〇七 一〇七</p> <p>一〇七 一〇七</p> <p>一〇八 一〇八</p>

<p>一 国語尊重 花月のすさび 一、吝嗇 二、不慮の備 三、ことば咎め</p>	<p>一 伊東忠太 松平定信</p>	<p>一 青年時代 二 自然を喜ぶ 三 二日の旗 四 活動の法悦 五 東関紀行</p>	<p>一 深作安文 芳賀矢一 川上眉山 和辻哲郎</p>	<p>一 一 八 八 八 八 一〇 八</p>	<p>一 一 八 八 八 八 一〇 八</p>
<p>二 見ぬ世の友 五、二つの矢 三 登山の意義 四 万里の長城 五 海洋文化圏としての日本 六 孟蘭盆 七 夏目先生におくる（書簡） 八 塩原 九 祈りなほし 一〇 北叟笑 一一 小国の記 一二 空ゆく雁 一三 曼珠沙華（和歌） 一四 二宮尊徳について 一五 しみのすみか 一六 一、高く申せ 一七 二、あとさき 一八 三、人麿 一九 四、物わすれ 二〇 光 二一 室鳩巢に与ふ（書簡） 二二 扇の的 二三 二条城の清正 二四 附録 助辞表（文語口語対象）</p>	<p>田部重治 室伏高信 内ヶ崎作三郎 相馬御風 芥川龍之介 尾崎紅葉 （吉野拾遺） 江部鴨村 正岡子規 （異本會我物語） 武者小路実篤 石川雅望</p>	<p>四、あり難きもの 一 縮むものの力 二 春の海（俳句） 三 自然の認識 四 蜀山と一九 五 京見物 六 詞の喜劇 七 旧都小景 八 一、東大寺 九 二、黒谷の鐘 一〇 花の下ぶし 一一 夜叉王 その一 一二 同 その二 一三 附録 武具甲冑図 一四 誤り易き語法一覽</p>	<p>相馬御風 富士川游 本山荻舟 十返舎一九 松村武雄 薄田泣菫 林久男 岡本綺堂</p>	<p>一 一 二 一 三 一 四 一 五 一 六 一 七 一 八 一 九 一 一〇 一 一一 一 一二 一 一三 一 一四 一 一五 一 一六 一 一七 一 一八 一 一九 一 二〇 一 二一 一 二二 一 二三 一 二四 一 二五 一 二六 一 二七 一 二八 一 二九 一 三〇 一 三一 一 三二 一 三三 一 三四 一 三五 一 三六 一 三七 一 三八 一 三九 一 四〇 一 四一 一 四二 一 四三 一 四四 一 四五 一 四六 一 四七 一 四八 一 四九 一 五〇 一 五一 一 五二 一 五三 一 五四 一 五五 一 五六 一 五七 一 五八 一 五九 一 六〇 一 六一 一 六二 一 六三 一 六四 一 六五 一 六六 一 六七 一 六八 一 六九 一 七〇 一 七一 一 七二 一 七三 一 七四 一 七五 一 七六 一 七七 一 七八 一 七九 一 八〇 一 八一 一 八二 一 八三 一 八四 一 八五 一 八六 一 八七 一 八八 一 八九 一 九〇 一 九一 一 九二 一 九三 一 九四 一 九五 一 九六 一 九七 一 九八 一 九九 一 一〇〇 一</p>	<p>一 一 二 一 三 一 四 一 五 一 六 一 七 一 八 一 九 一 一〇 一 一一 一 一二 一 一三 一 一四 一 一五 一 一六 一 一七 一 一八 一 一九 一 二〇 一 二一 一 二二 一 二三 一 二四 一 二五 一 二六 一 二七 一 二八 一 二九 一 三〇 一 三一 一 三二 一 三三 一 三四 一 三五 一 三六 一 三七 一 三八 一 三九 一 四〇 一 四一 一 四二 一 四三 一 四四 一 四五 一 四六 一 四七 一 四八 一 四九 一 五〇 一 五一 一 五二 一 五三 一 五四 一 五五 一 五六 一 五七 一 五八 一 五九 一 六〇 一 六一 一 六二 一 六三 一 六四 一 六五 一 六六 一 六七 一 六八 一 六九 一 七〇 一 七一 一 七二 一 七三 一 七四 一 七五 一 七六 一 七七 一 七八 一 七九 一 八〇 一 八一 一 八二 一 八三 一 八四 一 八五 一 八六 一 八七 一 八八 一 八九 一 九〇 一 九一 一 九二 一 九三 一 九四 一 九五 一 九六 一 九七 一 九八 一 九九 一 一〇〇 一</p>

[illegible]

二五	鈍大と靈化	常盤大定	一四八
	一、庚申猿		一四八
二六	二、命がけの仕事		一五〇
	附子	(狂言記)	一五二
附録	文官服装図 武官服装図		
卷九			
一	やまと心	河野省三	一
二	菅公	高山樗牛	九
三	学白のことば	木下長嘯子	一九
	一、山家四趣		一九
	二、しみ		二一
四	社会と感激	中沢臨川	二二
五	幣のおひ風	(土佐日記)	二七
	一、口調		二七
	二、三笠山の月		二八
	三、京入		三〇
六	いざよふ月	(十六夜日記)	三四
七	望の月	(竹取物語)	三八
八	和藤内	近松門左衛門	四一
九	成功の真意義	綱島梁川	四九
一〇	鼻長き僧	(宇治拾遺物語)	五三
一一	有王島くんだり	(平家物語)	五七
一二	海南小記の序	柳田国男	六七
一三	フランスの芸術	吉江喬松	七五
一四	元朝(俳句)		八〇
一五	擬古文四篇		八二
	一、蓮池の花	清水浜臣	八二
	二、石浜の雨	加藤千蔭	八四
	三、雪中眺望	橘守郎	八七
卷十			
一	御即位礼勅語	(官報)	一
二	国家と社会的意義	西田幾多郎	四
三	いせの物がたり	(伊勢物語)	一一
	一、東下り		一一
	二、小野の御宝		一四
	三、さらぬ別れ		一七
四	俳人と英雄	土田杏村	一八
五	羽衣	(観世流謡曲)	二五
六	歌謡に就いて	田辺尚雄	三一
七	美術と日本国民性	藤懸静也	三六
八	美術と日本国民性	その二	四一
九	うたひ物		四八
	一、神楽歌	(神楽歌)	四八
	二、催馬楽	(催馬楽)	四八
	三、朗詠	(和漢朗詠集)	四九
一〇	物のあはれ	本間久雄	五三
一一	須磨	(源氏物語)	六〇
一二	紫のゆかり	(更級日記)	六六
一三	清文私評	金子元臣	七〇
	一、春は曙		七〇
	二、あてなるもの		七五
	三、香炉峰の雪		七七
一四	神武天皇の御東征	(古事記)	八〇
附録	住宅図 奈良朝時代風俗図		
二二	うへ野山(狂歌)		一三〇
二三	世界の四聖	高山樗牛	一三三
二四	同	その二	一四二
二五	寺子屋	武田出雲	一四七

表3 東条操編『新制国語読本』総目次					
一九三七(昭和一二)年七月三十一日発行			一九三八(昭和一二)年一月一五日修正再版発行 三省堂		
卷一			卷二		
一 伸びゆくもの	(編者)	一	一五 御民われ(和歌)		八六
二 日出づる国	松井簡治	四	一六 万葉歌人	賀茂真淵	九一
三 朝	山村暮鳥	八	一七 断光録	綱島梁川	九三
四 さくらの花	芳賀矢一	一〇	一、苦痛の秘義		九三
五 旅の絵だより	五十嵐力	一五	二、自大自矜の一念を鎮めよ		九五
一 厳島より		一五	三、自然		九六
二 菅公配所の榎寺より		一六	一八 三餘の窓	(十訓抄)	九八
六 峠の茶屋	夏目漱石	一八	一、多言など謹むべきこと		九八
			二、才能を庶幾すべきこと		九九
			一九 祭のことは	村田春海	一〇一
			二〇 俳文二篇		一〇五
			一、十八楼の記	松尾芭蕉	一〇五
			二、武陽官邸の記	横井也有	一〇六
			二一 儒教の本質	小柳司気太	一〇九
			二二 学生への忠言	阿部次郎	一一五
			二三 我等の使命	(国体の本義)	一二三
			附録 近世文学一覧		
			現代文学一覧		

卷三		卷四	
七	狗ころ	二葉事四迷	二六
八	初夏の奈良	萩原井泉水	四〇
九	菖蒲の節句	島崎藤村	四八
一〇	木のぼり	前田夕暮	五四
一一	ニュートンと蠅	山本有三	五九
一二	学芸に志すもの	三浦梅園	六三
一三	文字の発達	(編者)	六六
一四	東郷大将	(忠烈美譚)	七二
一五	皇天の加護	小笠原長生	七八
一六	海と山	千家元磨	八五
一七	二山	川路柳虹	八六
一八	富士登山	萩原井泉水	八八
一九	夏休	幸田露伴	一〇七
二〇	涼み台	吉村冬彦	一一一
二一	蜀山人の盆燈籠	饗庭峯村	一二〇
二二	蜘蛛の糸	芥川龍之介	一二七
二三	寓言	柳沢淇園	一三九
二四	一 堪忍	平維章	一四一
二五	二 猫の名	徳富蘆花	一四三
二六	温故知新	大町文衛	一四五
二七	秋来る	柴田鳩翁	一四八
二八	秋の虫	桜井忠温	一五七
	心の洗濯	平田晋策	一六四
	將軍乃木		一七八
	日本の軍隊		
一	うてや鼓	島崎藤村	一
二	春の野外劇	横山桐郎	四
三	勿来の関	熊田葦城	一一
四	爽やかな心	河野省三	一五
七	仕事をする興味	小酒井不木	三六
八	他山の石	西条八十	四八
九	蓍	薄田泣菫	五〇
一〇	渡り鳥	橘南谿	五二
一一	求麻川	夏目漱石	六〇
一二	吾輩の運動	野邊地天馬	六七
一三	発明家エヂソン	額田六福	七四
一四	木村重成	村井弦斎	八六
一五	滋賀の山越	大町桂月	九四
一六	史伝を読むべし	芳賀矢一	一〇六
一七	一年のをりく	橘曙覧	一一〇
一八	君が代の歌	相馬御風	一一五
一九	たのしみは	河井醉茗	一二〇
二〇	雪国の春	上田恭輔	一三〇
二一	土の歎喜	姉崎嘲風	一三二
二二	満洲国の住み心地	坪内逍遙	一四六
二三	汝の母	新井白石	一五六
二四	安宅	下村宏	一六三
二五	我が幼時	鶴見祐輔	一七〇
二六	理想を持つて進め		一七五
二七	世界三都の印象		
一	明治天皇の御製	北原白秋	一
二	日本精神	西条八十	一〇
三	阿蘇のけむり	夏目漱石	一二
四	笑話	安楽庵策伝	二七

五	樂訓	貝原益軒	二七	一	星取り		二七
六	島四国	荻原井泉水	三〇	二	湯漬		二七
七	新緑の光	金子薫園	三六	三	朱檜		二八
八	杉田壹岐	室鳩巢	四二	四	数珠		二九
九	オリンピック	山川建	五〇	五	留守		三〇
一〇	最後まで	辰野保	五九	五	面白い文章と尊い文章	五十嵐力	三一
一一	日本人	西条八十	六三	六	名人団平	鈴木鼓村	四三
一二	鎮守の森	笹川臨風	六六	七	趣味	幸田露伴	五一
一三	板倉重宗	新井白石	七一	八	俳句の解釈	高浜虚子	五六
一四	覚悟	嘉納治五郎	七五	九	春夏秋冬	(諸家)	六四
一五	偉人野口英世の生家を訪ひて	土井晩翠	八一	一〇	誠の説	三浦梅園	六五
一六	競争と科学	丘浅次郎	九一	一一	武蔵野	国木田独步	七〇
一七	夏の風趣	田山花袋	一〇五	一二	箱根路	正岡子規	八二
一八	旅の今昔	石井満	一一一	一三	祭祀の礼	松平定信	八九
一九	空の旅	鈴木文史朗	一一七	一四	清浄の国	大町桂月	九四
二〇	膝栗毛	十返舎一九	一二五	一五	雪	堀口大学	一〇〇
二一	初学者のために	島崎藤村	一三〇	一六	スキー礼讃	木原均	一〇三
二二	趣味の日記	大谷繞石	一三八	一七	スポーツと人生	東龍太郎	一一二
二三	秋興	大木博夫	一四五	一八	独立	福沢諭吉	一一九
	一 秋のおとづれ			一九	鶯が鳴く	荻原井泉水	一二三
	二 秋昼			二〇	折にふれて	島崎藤村	一三一
二四	萩の家	落合直文	一四七	二一	我が袖の記	高山樗牛	一三四
二五	宿の園生	(諸家)	一五一		一 熱海の冬		一三四
二六	大西郷の大度	勝海舟	一五三		二 三保の春		一三五
二七	遣訓	西郷隆盛	一六〇	二二	千本松原	伊藤左千夫	一三八
二八	五箇条の御誓文	徳富猪一郎	一六三	二三	日新の工夫	貝原益軒	一四六
				二四	夜叉王	岡本綺堂	一五〇
				二五	哲人聖徳皇太子	高島米峰	一六六

三	朝鮮の四季	遅塚麗水	一六
四	晩春の別離	島崎藤村	二四
五	かゞやく露	生田春雨	三二
六	人臣の道	北畠親房	三七
七	小楠公	(太平記)	四二
八	吉野の行宮	(新葉集)	四七
九	試煉	吉田絃二郎	五〇
一〇	希望の海	川路柳虹	五四
一一	人の人たる所以	穂積重遠	五六
一二	為朝の弓勢	(保元物語)	六四
一三	待賢門の戦	(平治物語)	七一
一四	男性美	笹川臨風	七九
一五	上高地	田部重治	八四
一六	夏の雲	国富信一	九六
一七	水の風趣	大町桂月	一〇四
一八	生の味	相馬御風	一一〇
一九	道学ぶ人	松平定信	一一四
二〇	須賀の荒野	(諸家)	一一九
二一	友に与ふ	高山樗牛	一二二
二二	忘れ難き日	柿崎嘲風	一二六
二三	感化の力	黒岩涙香	一三〇
二四	師の説	本居宣長	一三三
	一新たなる説を出すこと		一三三
	二 師の説になづまざること		一三四
	三 わがをしへ子にいましめおくやう		一三六
	四 一むきにかたよること		一三七
二五	本居翁の遺蹟	芳賀矢一	一三九
二六	國語の愛護	五十嵐力	一四六
二七	敬神	杉浦重剛	一五二
三	歌話		
	一 秋の青柳		
	二 能因法師		
	童心童眼		
	薄の穗		
	空ゆく雁		
	旧都の月		
	法隆寺の印象		
	塔影		
	建築の美		
	つれづれ草抄		
	一 石清水		
	二 かなへ		
	三 この木なからましかば		
	四 猫また		
	五 高名の木のぼり		
	俚諺論		
	川柳点		
	狂歌		
	勅題		
	詠進者のしをり(自修文)		
	明と浄と直と		
	国民の特性と自然		
	冬から春へ		
	春興		
	扇の的		
	ほまれ		
	戯作三昧		
	芳流閣		
	知己難		
	長柄堤の訣別		
	大西祝		
	金子元臣		
	(諸家)		
	(編者)		
	五十嵐力		
	藤岡作太郎		
	相馬御風		
	貝原益軒		
	(平家物語)		
	芥川龍之介		
	滝沢馬琴		
	徳富猪一郎		
	坪内逍遙		

巻七			二六 現代青年に望む		巻八		渋沢栄一	
一	東洋の詩趣	夏目漱石	一	一	一	芳賀矢一	一	一
二	理想	阿部次郎	二	二	二	綱島梁川	八	
三	折節の移りかはり	吉田兼好	三	三	三	河井醉茗	一	
四	旅行論	山路愛山	四	四	四	(太平記)	一四	
五	奥の細道	松尾芭蕉	五	五	五	朝比奈知泉	二二	
	一首途		六	六	六	上田秋成	三〇	
	二 白河の関		七	七	七	藤岡作太郎	三九	
	三 松島		八	八	八	(諸家)	四四	
	四 平泉		九	九	九	(平家物語)	四八	
	五 象潟		一〇	一〇	一〇	高山樗牛	五二	
六	正風興隆	荻原井泉水					五二	
七	閑古鳥	(諸家)					五二	
八	百虫譜	横井也有	一一	一一	一一	石原正明	五九	
九	狂文二篇						五九	
	一 浮世	平賀源内					五九	
	二 鍾馗の画賛	石川雅望					五九	
一〇	風雅論	徳富猪一郎					六〇	
一一	那須の篠原	源実朝	一二	一二	一二	島崎藤村	六〇	
一二	落花の雪	(太平記)	一三	一三	一三	井原西鶴	六二	
一三	塩原	尾崎紅葉	一四	一四	一四	近松門左衛門	七一	
一四	足跡	相馬御風	一五	一五	一五	室鳩巢	八〇	
一五	深い心	得能文	一六	一六	一六	穂積八束	八三	
一六	檀園文抄	中島広足	一七	一七	一七	(和漢朗詠集)	八九	
	一 燕		一八	一八	一八	上島鬼貫	九一	
	二 書		一九	一九	一九	豊島与志雄	九五	
	三 漁村		二〇	二〇	二〇	志田義秀	一〇二	
	四 山家の興		二一	二一	二一	(謡曲)	一〇九	
一七	民謡	島木赤彦	二二	二二	二二	(狂言記)	一一六	
一八	ゆく川の流れ	鴨長明	二三	二三	二三	岡部日記	一二四	

<p>一九 十六夜日記抄 二〇 山庵雜記 二一 社会と感激 二二 世界の四聖 二三 心と言葉 二四 将来の日本 二五 近世・明治の文学</p> <p>一 近世 二 明治</p>	<p>阿仏尼 北村透谷 中沢臨川 高山樗牛 和辻哲郎 鹿子木員信</p> <p>一家路 二 箱根山 三 岡部の家 四 国学者の業績 五 日本精神 六 近古の文学</p> <p>岩城華太郎 小西重直</p>
<p>一 神秘の日本 二 春は曙 三 愚禿親鸞 四 寸鉄録 五 吉野の旅 六 花を惜しむ 七 大原御幸 八 松下村塾 九 若き友よ 一〇 光頼卿の参内 一一 青葉 一二 雅文三篇</p> <p>一 曇る夜の月を見る 二 泊泊舎に蓮を看る 三 蚊遣火</p> <p>東下り 富嶽の詩神を懷ふ 佐渡紀行 新島守 文学の新生 笈の小文</p>	<p>野口米次郎 清少納言 西田幾多郎 幸田露伴 本居宣長 村田春海 （平家物語） 徳富猪一郎 永井潜 （平治物語） （諸家）</p> <p>村田春海 加藤千蔭 中島広足 （伊勢物語） 北村透谷 尾崎紅葉 （増鏡） 久松潜一 松尾芭蕉</p> <p>一 日本人的自覚 二 大丈夫の覚悟 三 万里長城（抄） 四 国家の盛衰 五 世界平和への貢献 六 雅文抄</p> <p>一 萩をめづる詞 二 擣衣を聞く 三 漁父辞 四 初雁を聞く辞 五 雪をめづる記 七 我が国の絵画 八 科学者と芸術家 九 十訓抄 一〇 月は世々の形見 一一 光あれ 一二 須磨の秋 一三 源氏物語論 一四 徒然草抄</p> <p>高須芳次郎 幸田露伴 土井晩翠 大町桂月 山川端夫 清水浜臣 加藤千蔭 村田春海 藤岡作太郎 吉村冬彦 室鳩巢 姉崎嘲風 紫式部 本居宣長 吉田兼好</p> <p>一 万事は皆非なり 二 大事を思ひ立たむ人</p>

一九	天明調	与謝蕪村	一二一
二〇	おらが春	小林一茶	一二二
二一	生活の中心	阿部次郎	一二六
二二	法成寺の造営	(栄華物語)	一三五
二三	菅公の大臣	(大鏡)	一四〇
二四	中古の文学		一四六
<hr/>			
三	寸陰をしむ人なし	安倍能成	九一
四	さしたる事なくて	紀貫之 (増鏡)	九二
一五	行と観	藤井高尚	九三
一六	船旅		一〇〇
一七	月草の花		一〇八
一八	松の落葉		一一四
一	ものしりびと		一一四
二	ものまなび		一一五
三	論語		一一六
一九	万葉集序説	佐佐木信綱 (万葉集)	一一八
二〇	滝の都	久松潜一 (古事記)	一二四
二一	古事記と国家的精神	中村孝也	一二八
二二	須賀宮		一三五
二三	肇国の理想		一三八
二四	上古の文学		一四六